ホワイトヘッド宇宙論における神概念の位置づけ

村　田　康　常

序

はじめに、難解だと評されるホワイトヘッドの著作から、神概念について語っている箇所を引用したい。

「全包括的な何ものにも拘束されない価値づけという非時間的な働きは、創造性により創られた一つの被造物であると同時に、創造性を制約する一つの条件である。それはこの二重の性格をすべての被造物と共有している。常に合生（concrescence）においてあり、決して過去のうちにはない被造物としてのその性格のゆえに、それは世界からの反作用（reaction）を受け取る。この反作用が、その結果的本性である。それこそが、ここで『神（God）』と呼ばれるものである。」（PR31）[1)]

「有機体の哲学」と名づけられたホワイトヘッドの宇宙論は、創造性を制約し創造性に制約されつつ、世界との反作用において、創造性の具体的な活動としての新しさの創造を促す究極的な実在、つまり神について語る。あらゆる人間経験を説明する一般的な諸観念の構図としてのホワイトヘッドの形而上学的宇宙論は、その要のところで、大文字の〈神〉という観念を用いている。ホワイトヘッド宇宙論は、なぜ神を論じるのか。本論文では、ホワイトヘッド宇宙論における神概念の位置づけを探りたい。

1．近代世界における神の探求

神を探求するホワイトヘッドの思索は、「近代世界（modern world）は、神（God）を見失っており、かつ、神を探し求めている」（RM74）という言葉から始まる。ホワイトヘッドは、神を見失った近代人たちの精神生活のうちに、神を探し求める生命の渇望を見出す。「宗教とは精神の渇望（longing of the spirit）だということ」（RM85）は、人間的経験の本質に属することがらである。

「宗教とは、人間の自然本性が神（God）を探し求めるときの、その反応（reaction）である」（SMW191）とホワイトヘッドは言う。しかし、神を探し求める近代人に対して、実在の深みからの最初の反応は、否定的なものである。「探し求めることによって、お前は神を見出すことができるのか」という言葉をホワイトヘッドは『ヨブ記』から引用している（ヨブ11.7:AI104）。これが、神の探求に対する、実在の深みからの最初の反応である。すなわち、思弁的な探求によっては神は見出せないというのである。

近代自然科学は、均質かつ無限に広がっている幾何学的空間のなかを数学的に記述できる物理法則に従って運動する物的諸要素の宇宙を描き出したが、そこには、神を探し求める実存的な呼びかけに対していかなる応答もなかった。近代自然科学の開拓者であり、現代の実存哲学の源流ともなったパスカルは、次のように言った。「この無限の空間、その永遠の沈黙が、私には恐ろしい。」[2)] そのように沈黙する機械論的な自然が、人間の生きる世界の真の姿だという認識が自然科学の名のもとに行き渡ったのが近代世界である。

ホワイトヘッドの有機体の哲学の最終的な課題は、近代世界において神を探究する宇宙論的ヴィジョンの提示である。ホワイトヘッドは、パスカルが慄いたあの永遠に沈黙する畏怖すべき空間の中にあって、安らぎのうちに安住し、情熱のうちに探求したと言われている[3)]。彼は、沈黙する無限の空間の深奥に、価値を実現せんとする個々の経験に呼びかけ、実現された個別的価値を抱きとめ受け容れて創造的に前進する「生きている自然」（MT148）を見出していた。言い換えると、ホワイトヘッドは、近代化された現実世界の深奥から「今、ここ」に生きる我々の実存に呼びかけるものの実在を洞察している。

それは、そこに実在するというよりも、むしろまず、「今、ここ」の生において探し求められ希求されるものである。この希求は、世界の直中

で、特にこの近代世界にあって、孤独であるということ、自己の生を生きるのは自己自身しかいないということを知ったときはじまる。「宗教とは孤独性である。もし諸君が決して孤独でないなら、諸君は決して宗教的ではない」（RM17）あるいは「宗教の論題は、共同体における個別性である」（RM88）とホワイトヘッドは言い、さらに、「神（God）にさえ見捨てられたと感じたということこそ、宗教的精神の深さに属する」（RM20）と述べている。

ホワイトヘッドは、そうした探求と孤独こそが宗教だと言う。神を見失った近代世界という時代的情況を超えて、宗教には常に、自己の実存が神にさえ見捨てられたという孤独がある。神の探求は時代的課題というよりも、人間的実存に与えられた宗教的課題であるといえる。しかも、この探求は思弁によっては達成しえない。このとき、ホワイトヘッドの形而上学体系「有機体の哲学」にとって、神とは何を意味するのか。彼の哲学的思索の営みと、その成果として提示された形而上学的宇宙論体系は、神を論じるべき内的必然性と可能性を蔵しているのか。本論文は、ホワイトヘッドの神論が、その形而上学体系においてどのような位置にあるのかを検討する試みである。

2．形而上学的論理体系を完成させる究極の観念としての神

多くのホワイトヘッド研究者が、ホワイトヘッドが神を語る必然性は、彼の提唱した有機体の哲学の論理を辿れば見出せると考えている。言い換えると、有機体の哲学の論理が神の存在を要請しており、その思弁に沿って「生きている自然」を論究していくと、必然的に、神概念に行きつくと一般に解釈されている。

ここでは、この種の解釈をホワイトヘッドの神論についての〈体系完結的解釈〉と呼ぶことにする。

ホワイトヘッド哲学では、整合的で論理的な宇宙論体系が要請する形而上学的な究極的観念として神が論じられるというのが、この〈体系完結的解釈〉の立場である。そもそも有機体の哲学は、形而上学的宇宙論を構築する思弁哲学であり、それは「我々の諸経験のすべての要素を解釈しうる一般的諸観念の、整合的で論理的で必然的な体系を組み立てようとする試み」（PR 3）である。その論理体系の構築作業の中で、大文字の神という究極の観念が要請されたのだとすれば、その究極的観念は体系内においてしかるべく定義され、整合的かつ論理上必然的に位置づけられるものでなければならない。確かに、この観念は、その形而上学的体系において、厳密な定義と存在論的な資格とが与えられ、論理的に首尾一貫した整合的な記述がなされている。神は、時間的なアクチュアル・エンティティに対して非時間的なアクチュアル・エンティティと定義され、その原初的・結果的・自己超越的という三つの自然本性の解明によって宇宙論体系の中で整合的に論じられている。[4)]

この〈体系完結的解釈〉の見地からすれば、神という究極的な観念の正当性や資格は、その宇宙論体系の論理的整合性と十全性に照らして判断されねばならない。神はホワイトヘッドの体系上に定義された一つの観念的記号にすぎず、その資格と意義は、体系内での論理的整合性と必然性とによってのみ斟酌されるべきだという論理主義的な主張も、広い意味ではこの〈体系完結的解釈〉に含まれる。このような論理記号の整合性という読みも根拠のないものではない。ホワイトヘッドも「根本的な諸観念を論じる目的は、単に、それらを接続することから導き出せるそれらの整合性や両立可能性や諸々の特殊化を明らかにしようとするためであるにすぎない」（AI294）と述べている。

有機体の哲学の論理は、その体系を完成させるために、必然的に、神の存在を要請すると考えた解釈者たちの代表は、プロセス神学者のカブとグリフィンである。彼らは「神の存在の証明は、それ［プロセス神学］の仕事の本質的な部分ではない」[5)]と述べ、さらに、次のように断言している。「彼［ホワイトヘッド］が神を肯定するその根拠は、彼の全体的分析の文脈の内部では説得力があるが、彼独自の思想体系の外部でそれが定式化されるならば、その力を失う。」[6)]このような、体系内でこそ説得力のある神概念、体系が要請する神概念、というホワイトヘッド理解は、一般的なものだといえるだろう。神学者ばかりでなく、ホワイトヘッドに関心を寄せる物理学者も、ホワイト

ヘッドの宇宙論が体系として完結するために神概念を必要とすると考え、さらには、そこに宗教と科学の接点すら見出そうとしている。「ホワイトヘッドがプロセス哲学を定式化する際、神性（divinity）は首尾一貫した体系を構築するために必要なものと見なされる。それゆえ、プロセス思想は、科学と宗教を統合するための自然な方法を形成する。」[7)]

ところが、〈体系完結的解釈〉に対しては反論がある。ホワイトヘッド自身が、次のように言っている。

「まず第一に、神（God）はすべての形而上学的原理にとっては、それらの崩壊を救うために呼び出された例外として取り扱われるべきではない。神は形而上学的原理の主要な例証である。」（PR343）

有機体の哲学において論じられる神は、形而上学的宇宙論体系の叙述が大団円を迎えるにあたって、この体系の崩壊を食い止めるために最後に呼び出される機械仕掛けの神、deus ex machinaではない、とホワイトヘッドはいう。そうではなくて、神は、この形而上学体系全体が叙述しようとしているリアリティの一例、その「主要な例証」だとされるのである。

ホワイトヘッドの神概念についての〈体系完結的解釈〉が前提としているのは、彼の思弁哲学が、整合的で論理的、十全で適応可能な一般的諸観念の体系的図式を構築する試みだったという点である。哲学体系は徹頭徹尾合理的でなければならず、その論理は整合性と十全性をもっていなければならないと、合理主義的な解釈者は考える。そのような合理主義的な立場の根底には、ある信念が伏在している。それは、一般理論は、実在を表現する形式だという信念である。ホワイトヘッド自身、このような合理主義的信念が、数学、物理学から形而上学まで、あらゆる学の根底にあると考えた。

「本来的に一般的理論の例証として示すことのできないような要素は、経験のなかには見出せないというのが、合理主義の期待するところである。この期待は形而上学的前提ではない。それは形而上学を含めて、一様にすべての科学の探求の動機を形づくっている信仰である。」（PR42）

実在を表現する一般理論の探求が、彼の形而上学の一つの動機である。実在を解明する一般的理論を探求する合理主義的理性は、実在が可知的であり、その本質は合理的論理形式によって定式化されうるという信念に基づいている。「宇宙にはある本質があって、それはそれ自身を超えた諸関係をその合理性の侵害として禁止する。思弁哲学はそうした本質の探求である。」（PR 4 ）一般的理論へと定式化しうる実在の合理的本質がこの宇宙にはあるという確信こそ、思弁哲学を含めて、すべての学を動機づける信念である。しかし、この信念のさらに根底に、もうひとつ別の洞察があるということを、ホワイトヘッドは指摘する。

「しかし、宇宙におけるすべての要素が『理論』によって説明できるという要求には、限界がなければならない。というのは、『理論』そのものは、理論化のための素材を形成するために『与えられた』要素があることを要求するからである。」（PR42）

思弁哲学にとって大事なのは、合理主義的信念の限界を指摘する、より深いこの洞察である。どんな学問領域のどんな理論にも、「与えられた」要素があり、それによってその合理主義的解釈は制限をうけている。現代のあらゆる学問が考慮に入れなければならないのは、「我々の与件は、我々自身を含む現実世界である」（PR 4 ）ということである。理論を形成するために「与えられた要素」のうちには、自己言及的で不確定的な、いわば非合理的な要素があり、しかもそれはこの経験的与件の中核にある。すなわち、我々自身の実存というという不確定で未決定な要素が、この現実世界全体という直接経験の諸与件の中心にある。

思弁哲学の論理も科学理論も、現実世界において幾重にも重層的に開けていく実在の深みを汲み尽くすことはできない。「科学のなすべき仕事は、我々の人生経験を形づくっている知覚や感覚や情緒の流れのなかに存在している関係を発見することである。光景、音、味、匂い、手触り、および、さほど明確ではない感じによって繰り広げられるパノラマは、活動性の唯一の場である。」（AE105）この実在の大パノラマの不可測の多様性と重層的な深さの直中にあって、合理主義的理性はその全

体を見通すことも汲み尽くすこともできない。そこには、我々の実存とその出会いと別れという不合理が満ちており、生命の躍動と交錯という未決定の乱舞が溢れている。「科学の出発点となる現実の経験の場は、根本的に乱雑で、うまく適合されない性格のものである」(AE106) つまり、合理主義的理性にとっても、またいかなる思弁的で探求的な精神にとっても、「自然の複雑さは、汲み尽くすことができない (inexhaustible)」(PR106)。

ホワイトヘッドが目ざした論理体系は、十全かつ整合的に実在を表現するものであり、神に関する議論もそのような体系上に整合的かつ必然的に位置づけられねばならないということは、一面で正しい。しかし、彼はまた、論理によっては実在の全体を汲み尽すことはできないということも知っていた。直接に経験されるもののうちには、論理化を逃れる余剰がある。しかも、この余剰部分が指示しているのは、他ならぬ我々自身の実存である。そのような不確定で余剰的でしかも直接的な経験のうちにこそ、宗教の、そして神概念の、必然性がある。一般的論理体系としての有機体の哲学が神を語るのは、論理体系によって要請されたからというよりも、むしろ、論理によっては汲み尽くせない何かによって要請されているからだといわなければならない。

3．考究の出立点としての神の直接経験

そこで、有機体の哲学の神概念について、第二の解釈がなされうるだろう。すなわち、ホワイトヘッドの神論は、体系が要請するというよりも、体系的探求の出立点となった洞察を論証するためのものだ、という解釈である。この立場を便宜的に〈体系以前的解釈〉と呼ぼう。この解釈では、ホワイトヘッドの神概念は、形而上学的探求の最後に呼び出されるのではなくて、探求の最初に現れている直接経験の事実を指し示していると理解される。

「有機体の哲学」によると、この宇宙のいっさいが、生成し消滅していく出来事として生起し、そのいちいちの営みを通じて宇宙全体が創造的に前進していくとされる。このような「生きている自然」(MT148) という洞察の根本にある何か、ホワイトヘッドがその壮大な宇宙論を論じる出立点となった根本洞察を示す何かを、彼の神論が扱っているというのが、この〈体系以前的解釈〉である。すなわち、論理体系が要請するというよりも、論理体系のうちに繰り込まれなければならなかった洞察、まさにそれが原動力となって体系的な実在探求がはじまった、その最初の洞察の論理的定式化として、神論があるという解釈である。[8)]

しかし、こうした解釈もまた、重大な問題を含んでいる。

〈体系以前的解釈〉が含む問題点を考察するために、まず、ホワイトヘッド哲学の考究の唯一の出立点となったのは、「直接経験」と呼ばれる経験だったことを、再確認したい。彼は次のように述べている。「この現実世界は、我々の直接経験の主題というかたちにおいて観察されるように拡がっている。直接経験の解明は、どんな思想をも正当化する唯一のものであり、思想の出立点は、この経験の構成要素の分析的観察である。」(PR4) 直接経験とは、リアリティを探求する我々がそれを解明しようとし、また常にそこへと立ち返るべき、「あの究極的で統合的な経験」であり (PR208)、「我々自身をも含むこの現実世界」の全体を「今、ここ」にじかに感じているという経験である (PR4)。直接経験の与件は、この現実世界の全体なのである。

問題は、この経験の与件のうちに、神が含まれているか否かである。我々が我々自身を含むこの現実世界の全体を「今、ここ」において直接的に経験しているというとき、我々は神をも経験しているのか、この直接経験のうちに、神が臨在しているのか、について問わなければならない。

ホワイトヘッドの答えは微妙であるが、結論からいえば、否である。神は、直接に経験される現実世界のどこを探求しても、そのもの自体としては見出されない。言い換えると、この経験において客体化された神は、神を示唆する像であって、探求されている神自身ではない。ホワイトヘッドは、「汝は探求によって神を見出しうるか」という問いを『ヨブ記』から引用していた。我々は、我々自身の経験の世界のどこを探し求めても、神を見出すことなどできない。神は、直接経験における与件ではなく、現実世界のどこを探しても見出せ

ない。

しかし、この現実世界のどの細部にも、我々を創造へと促し、我々を「こちらへ」と誘う「宇宙の衝動」が満ちている。それをホワイトヘッドは「神的エロース」と呼ぶ。現実世界に見出される森羅万象が、いわば、神の息吹きを感じさせるのである。ホワイトヘッドは『エゼキエル書』（37.10）から、人々に「息吹き」が吹き込まれると「彼らは生き、その足で立」ったという場面を引用している（PR85）。神は直接的な経験の与件としてこの現実世界のうちに見出されはしないが、この世界のいっさいの事物が、その存在を示唆し、そこからの「息吹き」を伝えているのである。それゆえ、「我々は目に見える光景の背後にあるリアリティを探求しなければならない」（SMW178）。

我々の直接経験はいかに全的で包括的であるといっても、個別的で有限の存在という「人間的条件（human terms）」（ESP94）によって不可避的に制約されている。しかし、この経験のうちには、一切の事物が情動的なトーンを通じて開示されているのであり、それらの事物はその根底にある神的要素の実在を要求し、示唆しているのが感じられるのである。「なぜならば、限られたタイプの経験の内で、いっさいの現実的な事物の根底に有る何らかの実質について我々が何らかの観念を形成するためには、そのような実質がそこに有るということを事物の一般的性格が要求するのでないかぎり、いかなる事物も［そのような観念についての］知的理解を与えることができないからである。」（SMW 173-4）

ホワイトヘッドの答え方は、この点で微妙である。体系的探求の出立点となった洞察は直接経験の全的で統合的な具体的事実であり、その経験の与件は我々自身を含むこの現実世界の全体であるが、そこには、経験の与件としての神は見出されない。しかし、この経験において見出される現実世界のいっさいの事物が、その根底に有る神的要素の実在を示唆する。その実在は、この世界を通じて、この世界の彼方から吹き込まれてくる「息吹き」を通して感じられる。いわばその実在は間接的に感じられるのである。

ホワイトヘッドの神概念が、体系の出立点となった直接経験の事実から汲み取られているという解釈は、半ばは間違っており（神は直接経験のうちに現前していない）、半ばは当たっている（神は直接経験において間接的に指示されている）。こうなると、論理的議論は、神の存在を、直接に経験されるその与件によって論証することも否定することもできない。

こうして、神論についての〈体系以前的解釈〉も、その最も肝心な点について、保留しなければならない不明瞭さを内包していることになる。ホワイトヘッドの神論は、有機体の哲学の出立点となった直接経験の事実のうちには、明示的には見出せないものを論究しているのである。我々は、有機体の哲学における神概念の位置づけについて、従来研究者のあいだで主導的だった二つの解釈を検討したが、いずれも、ホワイトヘッドの哲学がなぜ神を論じなければならなかったのかについて、明確に答えることはできなかった。

4．宗教の歴史と形而上学

そこで、ホワイトヘッドの神概念の取り扱いについて、従来の研究者があまり言及していない他の解釈の可能性を検討すべきだろう。

まず検討すべきは、有機体の哲学が神概念を論じるのは、宗教の歴史学的考察としてである、という解釈である。〈体系以前的解釈〉では、ホワイトヘッドの神論は経験的に検証可能な対象としての神を直接経験のうちに求める試みだと理解されたが、この第三の解釈では、経験的に検証可能な対象としての神を人類の歴史において現れた宗教的表現のうちに求める試みだと理解する。これを仮に〈宗教史的解釈〉と呼ぼう。ホワイトヘッドは次のように述べている。

「人類の長い歴史を通じて疑問の余地のない一要素であり続けている宗教についてのある種の考察が、宗教の一般的諸原理に関するすべての討議の意義を保証するために必要である。」（RM14）

歴史のうちには、さまざまな仕方で神を表現するものが見出される。宗教的感情の表現としての歌や踊りや告白、祈りや感謝、あるいはその制度化としての儀礼、制度化された宗教組織や合理的な教義など、さまざまな表現がある。確かに、ホ

ワイトヘッドはこうした歴史的な表現を整理して、「感情」、「儀礼」、「合理化」、「一般化」と系統立てて論じている（RM）。

しかし、問題は、宗教の歴史学的考察と、形而上学的考察とは違うということにある。上の引用でも、この違いが意識されている。ホワイトヘッドによれば、形而上学は、一般的諸原理をめざす思弁である。一方、宗教史は、時代の制約を受けた個人的で特殊な諸経験をある観点から系統的に論じることによって、「人類の長い歴史を通じて疑問の余地のない一要素」としての宗教性を見出そうとする試みである。両者は密接に関係するが、後者を前者に還元することはできない。

ホワイトヘッドの神論は、個々の歴史的事例を集めてきて系統的にそれらを記述するような議論だけに終始しない。むしろ神に関する議論は、繰り返し歴史記述に触れるがふたたびそこを離れて、歴史研究の成果を傍証にしつつ神を形而上学的観念として、宇宙論体系の中で定義し論じていく方向へと戻っていく。ホワイトヘッドの哲学では、宗教史的考察は形而上学的な議論のための例証として言及されるが、主眼点は、宗教史ではなく、あくまで「宗教の一般的諸原理に関する討議」、つまり宗教性についての形而上学的考察である。この点で、〈宗教史的解釈〉は、ホワイトヘッドの意図を汲みそこねている。

そこで、第四の、批判的な解釈を打ち出す必要があるだろう。

それは、歴史記述における神論という〈宗教史的解釈〉から、形而上学体系における神論という〈体系完結的解釈〉へ向かうというベクトルで論じられる。いずれの解釈も批判の余地が十分にあるので、第四の解釈は両者の中間を取る。つまり、ホワイトヘッドの神論は、歴史記述ではなく形而上学であるが、完全に抽象的な議論において神を論じるものではなく、歴史的宗教の形而上学的合理化・一般化として神を論じているという理解である。このような理解を〈一般化解釈〉と呼ぶことにする。

形而上学的思弁においては、神概念は、一般的な理念として探求される。ところが、歴史のうちに見出される宗教的経験では、神は個別的で特殊な経験において、個々の人格に直接働きかけるものを解釈し表現する言葉である。歴史学は、こうした表現を手がかりにして、「批判的学者が自分自身の理論的判断にしたがって」その宗教的経験について自分自身の判断を下すことで成立する（AI４）。「歴史家は、過去を叙述するとき、何が人間の生の重要さを構成しているかについて、自分の判断に依拠している」のである（AI４）。

ホワイトヘッドは宗教の歴史を繰り返し論じるが、それは、ある時代にある場所である特定の人物によって、ある特定の限定された経験のうちで表現された、宗教的真理の特殊な表現形式に密着するためである。形而上学的思弁は、個人の特殊な経験という基盤から出発して、想像的一般化を通して、一般的な諸観念の論理的構図を構築する。

西田幾多郎は、「哲学者が自己の体系の上から宗教を捏造すべきではない。哲学者はこの心霊上の事実を説明せなければならない」と述べているが[9]、〈一般化解釈〉は、ホワイトヘッドがある意味で合理的な形而上学体系によって宗教を説明しようとしているという解釈であり、当然それは、彼が宗教を説明しようとして実は捏造してしまっているとする批判を許す。すなわち、もしホワイトヘッドの形而上学における神論が、経験的に検証可能な対象を歴史のうちに探求することを主眼とするのではなく、歴史的で多様な、個々に特殊な宗教的表現を、ある一般的な形而上学的構図のもとに合理的に体系化しなおす試みであるとすれば、それは、宗教を合理的に説明しようとして、歴史上どこにもなかった宗教体系を新たに作り出すことになるのではないか。

ヘブライズムの影響をぎりぎりのところで受けなかった古代ギリシア最後の哲学者アリストテレスの形而上学における神概念を取り上げて、ホワイトヘッドは次のようにいう。

「彼は、その〈原動者〉を取り上げるに際して、自分の一連の形而上学的思想の導くがままにどこへでも従う以外には、何の動機ももたなかったであろう。その思想は、宗教上の目的に役立つ神を産み出す方向に深く彼を引き入れるものではなかった。本来一般的な形而上学が、別の動機を自分の中に不当にも取り入れることをしないで、果たしてアリストテレス以上に進みう

るかは否かは、疑わしいだろう。」(SMW173)

アリストテレスを極めて高く評価して「その思想は、宗教上の目的に役立つ神を産み出す方向に深く彼を引き入れるものではなかった」というとき、ホワイトヘッドは、自らが解釈する神もまた宗教を捏造するものではなく、この宇宙とこの生の有りようについて、神も含めていっさいを論じるという形而上学的意図を抱懐していたのだろう。もちろん、そのときホワイトヘッドは「それはそのすべての面にわたって書くことはできない」(AI 3) ということを熟知していた。それでも、彼は宗教的経験に関してある合理的で一般的な解釈を追求したのであり、それゆえ彼は歴史家ではなく、形而上学者だったのである。〈体系化解釈〉は、この点を肯定的に評価する立場である。

「野心的すぎるというのが、思弁哲学への非難であった」とホワイトヘッドは言う (PR14)。このように非難する者たちは、何かを合理的に説明することが学問の進歩だということは認めても、合理的一般化がいっさいの「諸事物の一般的本性を表現する野心的な構図を組み立てようとする試み」(ibid.) であってはならないとする。なぜなら、すべてを包括的に説明する十全で合理的で整合的な、純粋な形而上学体系などというものは架空のものでしかないからだというのである。

批判者たちは、ある合理的な論理体系が正当化されるのは、それがすべてを整合的に包摂しているかどうかではなく、それがある特殊なことがらの説明に成功しているか否かである、という。そして、合理的な形而上学をこのテストにかけようとする。しかし、ホワイトヘッドは、あることがらの説明に成功したか否かというのは、「陳腐な独断的テスト」だと切り捨てる (ibid.)。野心的な思弁哲学の意義は、成功か否かによって決められるものではなく、そのようなテストを次々と課され、その観念体系の限界が決められていく中で、「その真理の核が抽出されるということ」によって明らかとなる (ibid.)。諸々の哲学体系は、時代ごとに登場しては順次、廃位し、当該の文明社会の知識在庫のうちに堆積していくが (PR 7)、それらの体系が表現しようとした「真理の核」は、体系から抽出され、匿名化されて、文明社会に浸透する。形而上学体系の意義は、そのようにして文明社会の核となるものを一個人の思索において論理体系として提出することであり、また、文明社会に堆積している不活性な知に新たな照明を当てて、それを新たな論理体系において提示し直すことである。こうした論理体系は当然、それを提出した個人の性癖やその時代の情況、言語の不十分さ、洞察の偏り、信念の偏りなどの歴史的な制約を不可避的に受けている。それは、一般的で普遍的な真理の表現としては、決定的に不十分・不完全であるが、肝心なのは、人類はそのような不十分さ・不完全さの中でのみ、前進していくということである。

ホワイトヘッドが思弁哲学的な宇宙論体系としての形而上学を意図したのは、それが、決定的に制約された人間的な知の不十分さと不完全さの中で、それでもある段階に到達したことを示すような試みだからである。そこには、我々にとって「真理の核」となる一般的なものの見方が表現されているかもしれない。もしそこに何らかの真理が不完全ながらも表現されているなら、それは、特殊な個人的、時代的背景によって制約され、特殊な言語によって表現された不十分な論理体系という制約を負いながらも、テストされ批判されていく中で、当該の文明社会の知の核となるような一般的信念へと抽出されていくだろう。

ホワイトヘッドやプラトン、アリストテレス、デカルトといった個人名を冠する体系は、テストされ批判されて廃位していくが、そこに表現された知の核は個人的な知の体系から抽出され匿名化されて文明社会に浸透し堆積して、我々が世界を理解する際の知の枠組みを提供する。哲学は、検証テストをクリアしなかったからといって、不成功とみなされ廃棄されるだけでは終わらない。この意味では、プラトンもデカルトも、その哲学体系は不成功であるが、その学問的価値は、それが、我々の文明社会に現に浸透しているある基本的な知を提供した具体的な試みだったということにある。形而上学的な論理体系の意義とはそういうものだとホワイトヘッドは言う。文明社会の歴史では、「哲学はゆっくりと働く」(SMW viii) のである。

もし、ホワイトヘッドの神論が、宗教的経験をある一定の観点から合理的に解釈した論理体系で

あるなら、それは、我々の宗教的経験を説明する知の体系となるはずである。ホワイトヘッドはそのことを認める。しかしそれは、ある経験的事実を十全かつ整合的に説明する知の体系としては、恐らく検証テストをパスしないだろう。それは、この点では不成功な体系である。それはその限界を露呈し、タレスから現代に至るまでの他の哲学者たちの体系と同様に、廃位していくだろう。しかしそれは、来るべき文明社会の知の基盤として浸透し、堆積していくかもしれない。それが何を説明し、何を説明できないかは、その体系の生命線ではない。そこには、宗教的経験の説明となるような一般的な原理が体系的に語られているが、肝心なのは、その体系的な説明の詳細ではなく、それが提示している、ある一般的なものの見方である。

世界をプロセスとして見るなら、我々の宗教的経験はどのように見られるかを述べたのが、ホワイトヘッドの体系的ヴィジョンである。それは、不完全な言い回しで表現された体系であり、しかも、ホワイトヘッド自身がはっきり認めているように、ことがらを完全に解明し説明したものではない。それは、宗教を合理的に説明しようとして論理体系を提出するが、その論理体系は合理性の観点からも十全性の観点からも不十分であって、むしろその意義は、その合理的体系がもつ暫定的な完結性と説得力によって、その論理体系が示すものの見方が文明社会に浸透していくかどうかにかかっている。その進み具合は微々たるものだが、哲学はゆっくりと働き、ゆっくりと文明社会に浸透する。哲学者たちは、そのためにこそ、個人的利害を超えて一般性を求めるという野心的な試みに従事するのである。

5．諸解釈の難点

ホワイトヘッドの神論は、宗教の合理的説明の産物であるという〈一般化解釈〉は、間違ってはいない。ホワイトヘッドの神論はその合理的説明を抜きにしては示すことができないが、しかし、その合理的説明がテストされ廃位されたのちも、文明社会の知の核として浸透し継続的な効果を残しうるようなヴィジョンを示そうとしている。そのような持続力を現代の我々は検証できない。ホワイトヘッドの神論は、それが匿名化されていく歴史過程においては、その合理性よりもそのヴィジョンの方が価値をもつような、ある一般的なものの見方を提示する試みである。

本論文では、ホワイトヘッドの形而上学における神概念の位置づけについて、２つの代表的な理解と２つのオルタナティヴを取り上げて議論してきた。検討してきた４つの立場には、それぞれ説得力があり、また難点もあった。最初に検討した〈体系完結的解釈〉は、彼の宇宙論的な形而上学体系が神概念を要請するというものである。しかし、この解釈はホワイトヘッド自身が否定した。少なくとも彼の意図では、それは体系が完結するために要請された神ではなく、むしろ形而上学体系において論じられなければならない実在の最も深い深みである。この論文で次に取り上げた〈体系以前的解釈〉は、彼の形而上学的探求の出立点となった直接経験の事実が神の存在を示唆するというものであった。この解釈は、説得力があるが、我々の経験のうちに神が客体的な与件として与えられることはないとホワイトヘッドは明確に述べているという難点があった。ここでは、これら２つの解釈の不十分さを指摘した上で、第三の〈宗教史的解釈〉を提示した。この解釈は、人類の社会が文明化していく歴史を辿るホワイトヘッドの歴史哲学的考察の中で宗教および神が宗教的形成物として扱われるというものであったが、宗教史学の構築はホワイトヘッドの形而上学的思弁の本来の意図からすれば副産物に過ぎず、むしろ形而上学における神概念の例証とされているという難点があった。そこで、本論文では最後に、第四の立場として〈一般化解釈〉を試みた。これは諸宗教の本源を尋ね人間の生の宗教性を顕らかにしようとする宗教学的考察において神が論じられるというものであった。しかし、ホワイトヘッド自身が、諸宗教の体系的で合理的な一般的説明には、説明する者の歴史的・状況的制約や言語の制約があって、合理的一般化はあくまで不完全で偏りがあることを認めている。こうして、〈体系完結的解釈〉から〈一般化解釈〉までを検討してきた結果、我々はある恐ろしい不可能性に直面している。

ホワイトヘッドの神論は、宗教的経験から出立

した合理的な観念体系であるが、それは経験に照らして検証することもできず、合理性によって検証することによってその有用性を測ることもできない。この不確実性こそ、ホワイトヘッドが描き出していた近代世界の特徴である。以下では、こうした近代的な不確定性の中で、もう一つの解釈の可能性があることを示したい。

6．メタファーとしての神概念

ここで示したい〈第五の解釈〉は、有機体の哲学の論理体系が不完全で未完成であることを示すという解釈、つまり、体系的論理の外なる実在を指し示す論理としての神論という理解である。この理解は、他の四つの立場のいずれをも排除するものではない。それらがホワイトヘッドの神論のある側面を言い当てていることを認めた上で、しかもホワイトヘッドが言わんとしていることはそれ以上のことであると主張したいのである。彼は、神を論じるとき、論理体系内では論じることができないものがそれでも有るということを論理で示そうとしてそうしているというのが、この解釈である。

まず、次の点を確認しておきたい。すなわち、ホワイトヘッドの論理が最終的に表現しようとしているのは、論理的・整合的には論じられないことがらが有るということだったということである。しかもそれは、思弁哲学の考究の出立点において与えられたことがら、最も身近なことがらでありながら、経験の対象として客体化されることはありえない。合理主義的視座から見れば、我々の実存は、論理では汲み尽すことのできない、ある逆説的な事態である。

このことをはっきり表明したのが、ホワイトヘッドの思弁哲学である。

注目したいのは、ホワイトヘッドの壮大な宇宙論・文明論が最後に神や〈平和〉を論じるとき、その言葉使い全体に満ちている、ある否定的なトーンである。神や〈平和〉を否定するのではない。それが、論理では語れないということをホワイトヘッドは繰り返す。問題となるのは、たとえば、有機体の哲学がその「最終的解釈」において神の本性を論究する際の、次のような言明である。

「我々は、あるがままの、あるいはあるべき現存の諸宗教との関連から離れて、ここで展開されている形而上学的諸原理が神の本性に関してこれらの点で何を要求するかを冷徹に研究しなければならない。ここには、証明の性質を帯びたものは何もない。そこにあるのは、ただ理論体系と諸事実を提出することとの対決だけである。しかし、事実についての体系化されていない報告は、それ自身大いに論争の的となるものであり、体系は、みずからが認めているように不十全である。……議論の説得力は、まったくのところ、我々の意識的経験におけるある程度例外的な諸要素――つまり大雑把に宗教的ならびに道徳的な直観として一括されてもよいような諸要素――を照明することにかかっている。」（PR343）

合理主義的な立場からは、この言明は、敗北的ですらある。有機体の哲学が論究した形而上学的諸原理が、神の本性をどこまで論じているかを検証するような明確に論理的な基準はないというのだ。ホワイトヘッドがここで「照明」を当てようとしている宗教的・道徳的な直観は、論理的に真であるか偽であるかを証明されるようなことがらではない。真偽は命題のもつ機能のひとつに過ぎず、宗教的直観は合理主義的な理解を超えた経験の深みを開示するものである。ホワイトヘッドは宗教的経験の深みをまさに深みとして保持するような解釈を提示しようとしている。

「再び、強烈な宗教的感情を考えてみよ――［たとえば］福音書の御言を黙想しているキリスト者を考えてみよ。彼は『真偽』を判断しているのではない。彼は、御言の価値をフィーリングの要素として引き出すのである。」(PR185)

そこには、論理的命題の真偽や論理体系の整合性と妥当性を証明するような合理的基準への配慮は一切はない。そこにあるのは強烈な感情と畏敬を伴った深い確信だけである。ホワイトヘッドは、そうした強烈な宗教的感情や直観において開示される経験の深みを照らし出すような議論に訴える。しかし、そのような議論は、それが我々にある感情を、ある直観を、共感的に喚起するような説得力をもつかぎりでのみ、有効なものとなるのだ。神を論究する「最終的解釈」は、まさしく

この地点から、すなわち、合理主義的な議論が潰える地点から開始される。「最終的解釈」は、命題の真偽判断や体系の整合性の確立などをめざしているのではなく、我々自身の直接経験の深みを指し示すメタファーとして、「人間的実存のどの局面にも切り込んでくる」（AI161）ようなあの経験を意識的に喚起させようとする。

それは、論理的議論の「断層（gap）」に展開する思弁である。「断層」は、有機体の哲学の体系的思弁の総仕上げともいうべき文明論において〈平和〉を論じた『観念の冒険』の最終章最終節での、次のような言明において告知される。

「この段階まで展開されてきたような〈文明〉の概念は、本来的に不完全なままである。こうした断層を論証することができるような論理的議論はない。こうした議論は、形而上学的直観の意識的実現のための補助に過ぎない。」（AI 295）

「断層」が開けるのは、それまでの全体系を単なる「補助（subsidiary helps）」とし、整合的な論理的議論による論証を拒絶するような形而上学的直観においてである。有機体の哲学の論理の階梯をここまで登ってきた解釈者は、それがまさに補助的階梯に過ぎなかったことを言明するこの言葉によって、「断層」に開いた深みに放り出されてしまう。このとき、全体系が、ある実在を指し示す補助的論理として、すなわち一つの「メタファー」として機能する。

有機体の哲学の最終的解釈は、〈超越〉の観念に結びつくようなある卓越した「感じ」を指示している。ホワイトヘッドは先の引用に続けて、次のように言う。

「観念の不完全性は、〈超越〉の観念と、すなわち、〈冒険〉、〈興趣〉そして〈平和〉に本質的な感じと、関係している。この感じは、それを理解するために、我々が〈エロース〉の観念を、〈一〉としての〈宇宙〉における〈冒険〉の概念に含み込ませることによって、補うことを必要とする。」（AI295）

手短に解説を試みると、〈冒険〉と〈平和〉（ないし〈平安〉）は、宇宙が文明化していくプロセスにおいて保守的な立場を超え出て新しさを目指す自己超越と、超越した自己を包摂して全体の重厚な調和を実現する文明の徳であり、〈興趣（Zest）〉はこのプロセスにおいて経験の強度を高めようと個々の経験の契機を駆り立てる情動的なトーンである。

思弁哲学において、実在の表現形式として体系化された整合的論理の考究は、直接経験の観察から出立する。この出立点は、殊に、宗教的経験のうちに例証される実在の最も深い深みを探求する論理を吟味する場合、重要である。宗教的経験において顕現する実在の不可測の深みは、ただ合理的な思索と私情を交えない客観的な観察とによって考究されるのではない。ホワイトヘッドは直接経験、特に宗教的経験の観察的分析においては、「情緒」こそが肝心だと言う。

「しかし、情緒から完全に解放されているとき我々がもっともよく観察するというのは、事実ではない。［情緒という］関心の一方向が存在しないかぎり、我々はまったく観察しない。……こうして、宗教的関心という論題にある特有の仕方で集中するのに最適な、ある種の情緒的状態がある。」（RM124）

宗教的関心という論題に集中するホワイトヘッドの「最終的解釈」は、こうした「ある種の情緒的状態」から、すなわち、宗教的な個別的事例のうちに喚起された畏敬や感謝、嘆きや歓喜などの情緒的高まりが脱自的な高揚感を究めるに至るまでの経験の強度の高まりから、出立する。その実在の深みの論究は、〈冒険〉、〈興趣〉、〈平和〉といった諸観念に本来属しているあの自己を超え出る何ものかの感じを、あの「〈超越〉の観念」のうちに見出そうとする。

こうして、「最終的解釈」は、これらの観念が含意する「感じの深みをかきたてることができる強力で刺激的な要素」（AI295）としての「〈超越〉の観念」に訴える。我々の理性が情緒の深まりに圧倒されて、ある強烈な価値経験において「〈超越〉の観念」としか呼べないようなものを抱懐するところに、理性的探求によっては究め難い実在の最も深い深みからの何かが「感じられ」、「かきたてられ」る。それらの観念は、「現在の端的なアクチュアリティの境界を越えて飛躍する感じ」（AI291）を示しており、この感じの中で、我々は、我々自身を超えたものの息吹きに触れている

のである。

あの「断層」は、このように〈超越〉の観念を喚起する飛躍の感じにおいて、「宇宙のかの永遠なる側面」（RM.124）が「一つの今、一つのここ」（SMW69）に感じられるところに開けている。この「断層」は、「気をつけて、何かがそこに有る」という、あの感じの深みをかきたてる。宗教的情緒が理性によっては究め難い実在の不可測の深みを開き、しかもこの「断層」においてこそ、あの〈超越〉なるものの内在する感じ、つまり我々自身をも含む森羅万象を生かす息吹きに我々は触れる。このダイナミズムを表現するメタファーとしてホワイトヘッドが提示するのが、現在の自己超越を促す〈エロース（Eros）〉である。

ホワイトヘッドは、〈神的エロース〉（AI277）あるいは「創造的〈エロース〉の働き」（AI276）という表現をする。明らかにこれは、プラトン哲学の継承である。しかし彼が継承したのは、後世の学者たちによっていわゆる「イデア論」として体系化された二世界論的図式ではない。ホワイトヘッドがプラトンから継承したのは、この現実世界が、合理主義的視座から見れば理念的に対立するふたつの要素の結合であるという洞察である。プラトンから継承したものをホワイトヘッドは端的に次のように表現する。

「時間的なるものは永遠なるものにあずかることで生じる。この両者は、時間的なるもののアクチュアリティを可能的であるものの無時間性と結びつけるようなあるものによって媒介される。この究極的な実質は、世界における神的要素である……。」（PR 40）

時間的なるものと永遠なるものとが結びついて、この我々自身を含むこの現実の世界が生起する。合理主義的視座からはこのような結合は矛盾であり、逆説である。しかし、直接経験のうちにホワイトヘッドが見出したのは、永遠なるものと結ばれることで時間的なるものが生起してくるという逆説的な出来事なのだ。現実世界は、時間的なるものと永遠なるものとの一体化なのである。論理的には矛盾であり、逆説であるが、両者は我々の直接経験において分離されず一つに感じられている。我々は一歩一歩、足下にこの結合を感じながら生きている。無論、我々自身が両者を媒介する神的要素そのものなのではない。我々もまた、永遠なるものにあずかることで生起する時間的なるものの具体的な出来事なのである。

そして、我々自身がこのような結合として生起するところに、自己への生成という衝動がある。それは、この現実世界の直中で、このどこまでも多様性に満ちた世界全体を引き受けて、自己自身へと生成せよという促しであり、自己自身を超え出よという誘いである。「〈エロース〉は理想的な完全性の実現へと向かう衝動である。」（AI275: cf. AI.148, 251, 275-7）

このエロース的衝動は、個別的自己の内面から湧き起こる内的な衝動であるというよりも、時間的世界に進入する永遠なるものを介して、あの神的要素から吹き込まれてきて「新しい個別的事実を創造する感じの〈息吹き〉（The Breath of feeling）」（PR85）である。ホワイトヘッドが旧約聖書『エゼキエル書』（37.10）からこの「息吹き」という比喩を引用したのは（PR85）、いっさいがそれによって生きているということ、あの逆説的結合の媒介者からの「生きよ」という促しが今この瞬間にも我々を吹き抜けているのだということを示すためである。

直接的に感じられるいっさいの事物を通じて「今、ここ」へと働きかけるこの「息吹き」は、「〈宇宙〉にまといつく完全性の限定された理想へと向かうあの衝動の起源を我々が垣間見ることのできる人間的条件（human terms）」（ESP94）を開く。現在の瞬間の場における経験の契機は、〈超越〉の観念へといざなうこの「息吹き」によって、「今、ここ」へと内在し受肉する永遠なるものの働きを、自己を突き動かし、自己を超え出て宇宙の創造的前進への参与を促す「〈宇宙〉の衝動」（AI194）として感じるのである。

しかしこの神的要素は、あくまで限定された「今、ここ」での生き生きとした経験という「人間的条件」において垣間見られるにすぎない。「〈超越〉の観念」が指示する究極の実質は、直接的に経験される現実世界のどこを探求しても、そのもの自体としては見出せない。〈第二の解釈〉で見たように、それは、現実世界の客体化されたあらゆる与件において示唆されているが、経験の客体として与えられているのではない。換言すれ

ば、客体化された神は、神ではない。しかし、この現実世界のどの細部にも、創造へと駆り立てる〈興趣〉を通じて、その「息吹き」が感じられるのである。

ホワイトヘッドはそれを「究極の実在」や「世界における神的要素」や「背後に有る実在」と表現している。この実在は、直接経験において感じられる宇宙のいっさいの事物の根底に、まさしく「そこに有る」が、我々がいっさいの事物を「今、ここ」に現前しているものとして感じるようには、その実質を感じることはできない。そこに、論理的議論が否定することも解明することもできない「断層」が開ける。

我々は、この背後的な実在からの「息吹き」を吹き込まれて「今、ここ」に生起するのであり、そして、この「息吹き」に促されて「今、ここ」のアクチュアリティを超えて「精神の冒険（an adventure of the spirit）、すなわち、到達しえないものを求める飛翔」（SMW192）へと駆り立てられるのである。我々にはこのとき、ただあの「神的な要素」しか見えなくなっているというのではない。この現実世界のどこにも、それは見出せない。我々はこの「息吹き」に触れそれを吹き込まれてはじめて「今、ここ」に生きているのに、そこに我々が見出すのは、この現実世界の当たり前の光景であるにすぎない。しかもそのとき、我々にとってその何の変哲もない光景は、あの「息吹き」に吹き貫かれた情感に満たされている。それは、今まさに我々自身の実存を吹き抜けていくあのエロース的衝動、「生きよ」という促しである。自己自身となれ、自己自身を超え出よ、この世界に満ち満ちよ、という「息吹き」である。そこに神が直接的に現前しているわけではない。しかし、我々の自己自身を含むいっさいの事物がこの強烈な情緒を喚起し、それによって、いっさいの事物がその背後に、この可視的・可感的な世界を超えた彼方に、あの「神的要素」が有るということを象徴的に指し示している。

時間的世界は、永遠なるものとの結びつきによって促されて、創造的に前進する。その結びつきの焦点となるが、〈超越〉の観念に結びつく深い感じによって喚起された「今、ここ」での生き生きとした経験であり、この感じのうちに、ここで両者を一つに結びつけるあの「神的要素」の「息吹き」、すなわち〈神的なエロース〉が感じられる。確かに、神的要素それ自体は、この現実世界のどこにも見出されない。しかし、強烈な情緒をもって感じられた現実世界のすべての要素が、この逆説的な結合という一般的性格において、背後に有る神的要素を要求しているのであり、そのような仕方で、すべての事物が神的要素の実在を指示する象徴として、「暗黙のうちに想像的飛躍に訴えるメタファー」（PR 4 ）として作用しているのである。

ホワイトヘッド哲学は、論理では語れないものがあることを論理で示そうとする。そのような論理は、逆説的な表現形式によって我々のうちに〈何か〉を喚起することで、実在の測りえない深みを指し示す「メタファー」である。そのメタファーによってホワイトヘッドが示そうとしたのは、我々の実存は、まさにそのような論理では語りえないものから由来しており、またそこへと帰っていくということだった。そして、ホワイトヘッドにとってこのとき「我々」とは、この時間的世界に生起するいっさいの契機を指していたのである。

このような、現実世界のいっさいがその背後に超越的実在を指し示す情緒的な興趣と哀感に満ちた象徴として現前するというのが、ホワイトヘッドの自然神学である。確かにそこには、ある卓越した瞬間における宗教的経験の論理的表現が語られている。しかしそれは、実在の不可測の深みを照らし出す開明的論理ではなく、その深みへといざなうような「〈超越〉の観念」を喚起するだけの補助的論理にすぎない。

ホワイトヘッドは、宗教の歴史的形成過程を辿りながら、神的要素を求めて飛翔する人間的精神の冒険とその合理的解釈の試みとが描く我々自身の足跡を辿っている（RM）。つまり、彼の興味は、あくまで、手の届かない彼方の何ものかを希求しつつ、今、ここにおいてその彼方からの「息吹き」に吹き貫かれて生きている我々の実存に向けられていたのである。

この〈メタファー的解釈〉には、確かに、曖昧さがともなう。その曖昧さは、ホワイトヘッドの論理体系全体が、その「断層（gap）」において、

逆説的な論理形式を採ることによって実在の深みからのあの「息吹き」への洞察と直観とを喚起するような「メタファー」として機能する、という点にある。ホワイトヘッド自身、メタファー的論理にたやすく頼るような思わせぶりな思考を排除している。それは、「否認されるべき思考習慣」（PR xiii）だと、彼は言い、背理法や逆説によって何らかの本質を指示しうるとする態度を厳しく戒めている。また、論理上の不整合があった場合、その論理に先行する推論や観察の何かが間違っていると反省するのではなく、その不整合によって何かを示すことができると考える態度を批判している（PR xiii）。

しかしまた、他方では、ホワイトヘッドは、論理表現の不完全さと洞察の不十分さ、そして特に言語の不十分さを自覚しろと戒めてもいる。『観念の冒険』の第十章第一節では、「神の内在という究極的主題（the ultimate theme of the divine immanence）」（AI161）は複雑多様で微妙で切実な「信仰」あるいは「宗教的経験」において例証されているが、「哲学」はその多様性から一般的に一致する要素を抽出してくるのだと述べられている。さらに、「問題はこの序論が示唆するほど単純ではない」（AI161）とホワイトヘッドは強調する。我々がメタレベルでの根拠づけを議論するとき、それは我々の実存そのものに関わることがらであり、我々の関係性の全体が問われる問題であり、信仰ないしは宗教の問題でもある。この宇宙に抱かれて、その美的調和のうちに神の「息吹き」を感じるとき、それは「人間的実存のどの局面にも切り込んでくる」（AI161）ような複雑で多様な、微妙で切実で強力な経験であるとホワイトヘッドはいう。論理では汲み尽くせない実在の深みが、まさに「一つの今、一つのここ」（SMW69）において、我々の実存の直中に切り込んでくる。それゆえ、その「簡単な解決はにせの解決である」（AI161）とホワイトヘッドは厳しい口調で断じている。

哲学の陳述は、最後究極的な確実性をもちえないし、「陳述の最後究極性に関して、独断的な確実さを単にほのめかすだけでも愚かである」（PR xiv）とホワイトヘッドは言う。我々が我々の言語や記号を用いて論理を組み立てるとき、それは、完全で最後究極的な確実性をもった論理表現ではない。それゆえ、その論理表現は、知の創造的前進と想像的飛躍へと開かれた、不完全な試みとして受け取らなければならない。所与の論理表現からの想像的飛躍が、死んだ知識を生き生きした知識へと活性化させる「観念の冒険」である。

論理体系がそのようにして創造性と想像力へ開かれているとき、その論理表現を解釈者が理解する仕方が、「暗黙のうちに想像的飛躍に訴えるメタファー」である。我々は、不完全な論理体系を実在を指示するメタファーとして暫定的に受け入れ、解釈者のひとりひとりが創造的かつ想像的にそれを解釈していく。ホワイトヘッドを読むということは、想像的飛躍へと訴えるメタファーの冒険に、我々自身が参与するということなのである。言い換えると、ホワイトヘッドの論理は、特にその「最終的解釈」において、読み手ないし解釈者との関係の中で、そのつど「暗黙のうちに想像的飛躍に訴えるメタファー」（PR 4）として機能する。ホワイトヘッドの論理における神の概念こそ、そのようなメタファーとして読まれねばならない。

結

本論文では、ホワイトヘッドの形而上学的宇宙論体系における神概念をいかに解釈するか、体系全体に対してどのように位置づけるかを検討した。〈体系完結的解釈〉、〈体系以前的解釈〉、〈宗教史的解釈〉、〈一般化解釈〉を取り上げ、いずれもが説得力をもちながら、ホワイトヘッドの体系によって否定されているか、体系的意図からは外れているといった難点をもっていることを見てきた。そこで、この論文では、不完全ながらも、形而上学体系における神概念を、語りえない実在の深みを逆説的に指し示すメタファーだとする理解を提示した。このような解釈によって、ホワイトヘッド形而上学に対していかなる読みが可能になるのか、また、神を見失った近代世界で神を探求する人間にいかなる「補助」を与えるのか、今後の研究課題としたい。

注

1）ホワイトヘッド（Alfred North Whitehead）の著作は、引用に際して以下のように略記し、該当するページ数を付記する。なお、引用文中の傍点は原文でイタリックで表記された箇所を、〈　〉は大文字で表記された箇所を、‥‥‥は引用者による省略を示す。ただし、〈神〉（God）は、特に参照が必要な場合を除いて〈　〉を付さず、必要に応じて原語Godを付記した。

SMW : *Science and the Modern World.* 1925. New York: Free Press, 1967.

RM: *Religion in the Making.* 1926. New York: Fordham University Press, 1996.

PR : *Process and Reality.* 1929. Corrected Edition. New York: Free Press, 1978.

AE : *The Aims of Education and other Essays.* 1929. New York: Free Press, 1967.

AI : *Adventures of Ideas.* 1933. New York: Free Press, 1967.

MT: *Modes of Thought.* 1938. New York: Free Press, 1968.

ESP : *Essays in Science and Philosophy.* 1947. New York: Greenwood Press, 1968.

2）B．パスカル『パンセ』B.206:L.201.

3）ルシアン・プライスは、ホワイトヘッドが多忙で意欲的な日課を送りながら、静謐さと穏やかな安らぎを保ちつつ、〈興趣〉と〈哀感〉をともなった生滅の世界をどこまでも探求し愛をもって世界ぜんたいを抱擁する不撓不屈の精神を生きたことを次のように語っている。「彼は、我々の大部分が気づいてもいないような諸問題に直面し、これを解決していた。ひとは、そこに恐れを知らぬ人間のいることを感じとった――彼は、人類共通の敵である病気や貧困や老齢や不運や死のようなものを恐れなかったし、また、人間の運命のとほうもない不可解さや、宇宙の無限の広がりを恐れなかったのである。こうした畏怖すべき空間の中で、彼は安らぎ、安堵していた。」（Price, Lucien, ed. Dialogues of Whitehead. 1954. New Hampshire: David R. Godine, 2001. p.17: L．プライス編『ホワイトヘッドの対話』（岡田雅勝・藤本隆志訳）みすず書房、1980年、25頁））。

4）アクチュアル・エンティティとしての神の三つの自然本性については、山本誠作『ホワイトヘッドの宗教哲学』行路社、1977年を参照。

5）Cobb, John B., Jr. & Griffin, David Ray, *Process Theology: An Introductory Exposition,* Loisville: The Westminster Press, 1976, p.41.（延原時行訳『プロセス神学の展望』新教出版社、57頁）

6）Cobb & Griffin, Process Theology, p.42.（延原時行訳『プロセス神学の展望』新教出版社、59頁）

7）Jungerman, John A., *World in Process: Creativity and Interconnection in the New Physics,* Albany: State University of New York Press, 2000, p.3.

8）たとえば、拙著「有りえないものの実在―ホワイトヘッドにおける逆説の論理」（日本ホワイトヘッド・プロセス学会『プロセス思想』第12号、2006年、65-86ページ）では、ホワイトヘッドの直接経験論と神論との関係について考察している。

9）西田幾多郎「場所的論理と宗教的世界観」『西田幾多郎全集』第十一巻、岩波書店、1949年、371ページ。

Nagoya Ryujo (St. Mary's) College, Annual Report of Studies, Volume 31, 2009

Examining the Metaphysical Concept of God in A. N. Whitehead's Cosmology

Murata, Yasuto*

本論文では、「有機体の哲学」と呼ばれるホワイトヘッドの形而上学的宇宙論体系における神概念をいかに解釈するか、体系全体に対してどのように位置づけるかを検討する。現代の形而上学として注目を集めるホワイトヘッドの「有機体の哲学」において、神はいかなる位置を占めるのかが、ここでの主題である。ホワイトヘッドの神概念の解釈として〈体系完結的解釈〉、〈体系以前的解釈〉、〈宗教史的解釈〉、〈一般化解釈〉を参照ないし提示し、それらのいずれもが説得力をもちながら、難点をもっていることを指摘した。それらに共通する難点は、ホワイトヘッドの体系によって否定されているか、体系的意図からは外れているということである。そこで、この論文では、不完全ながらも、形而上学体系における神概念を、語りえない実在の深みを逆説的に指し示すメタファーだとする理解を提示した。

キーワード：ホワイトヘッド，神，形而上学，メタファー

**Nagoya Ryujo (St. Mary's) College*